わが心の地図

岡部伊都子

わが心の地図

創　元　社

わが心の地図

©昭和44年7月20日　初版第1刷発行

定価 300円

著者　岡部伊都子（おかべいつこ）

発行者　矢部良策

印刷所　伊藤書籍印刷株式会社

発行所　株式会社 創元社

大阪市北区樋上町45（〒530）

TEL大阪（363）2531（代）

<東京営業所> 東京都新宿区神楽坂6—73（〒162）

TEL東京（269）1051

落丁・乱丁はおとりかえいたします（安田製本）

目次

旅の子

旅の子……2
心の旅……6
都心のホテル……11
片隅の椅子……13
人間の形……16
失敗……23
大阪あるき……26
六甲山上にひとり過す日……29
したたり……35
これからの月……37

被爆の地……40
東北の旅……45

奈良・京都

白い道……50
奈良らしさを思う……54
三重の小塔……60
しずかな白昼……64
京の安息……66
双が岡……68
京の冬……73
いかるがの里……78
飛鳥路……80
嵯峨路……82
早春の寺でら……88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

京の庭

瑠璃光庭……三千院……96
白い庭……詩仙堂……97
民族の美感覚……修学院離宮……99
心流れる斜面……泉涌寺……100
蹴鞠の広庭……桂離宮……102
生きる石……西本願寺……103
庭湖の冬……大覚寺……105
唐風の景……東本願寺・渉成園……106
見事な主人石……大徳寺・大仙院……108
苔のいのち……西芳寺……109
雪山を主に……円通寺……111
白砂と黒石……南禅寺・金地院……112
奇をてらわぬ気品……等持院……114

銀の砂……慈照寺……116
きよらかな平面……盧山寺……117
嵐山がのぞく……鹿王院……119
うつくしい高台……光悦寺……120
花と石と……醍醐三宝院……122
池庭の花……平安神宮……123
枯山水……妙心寺・退蔵院……125

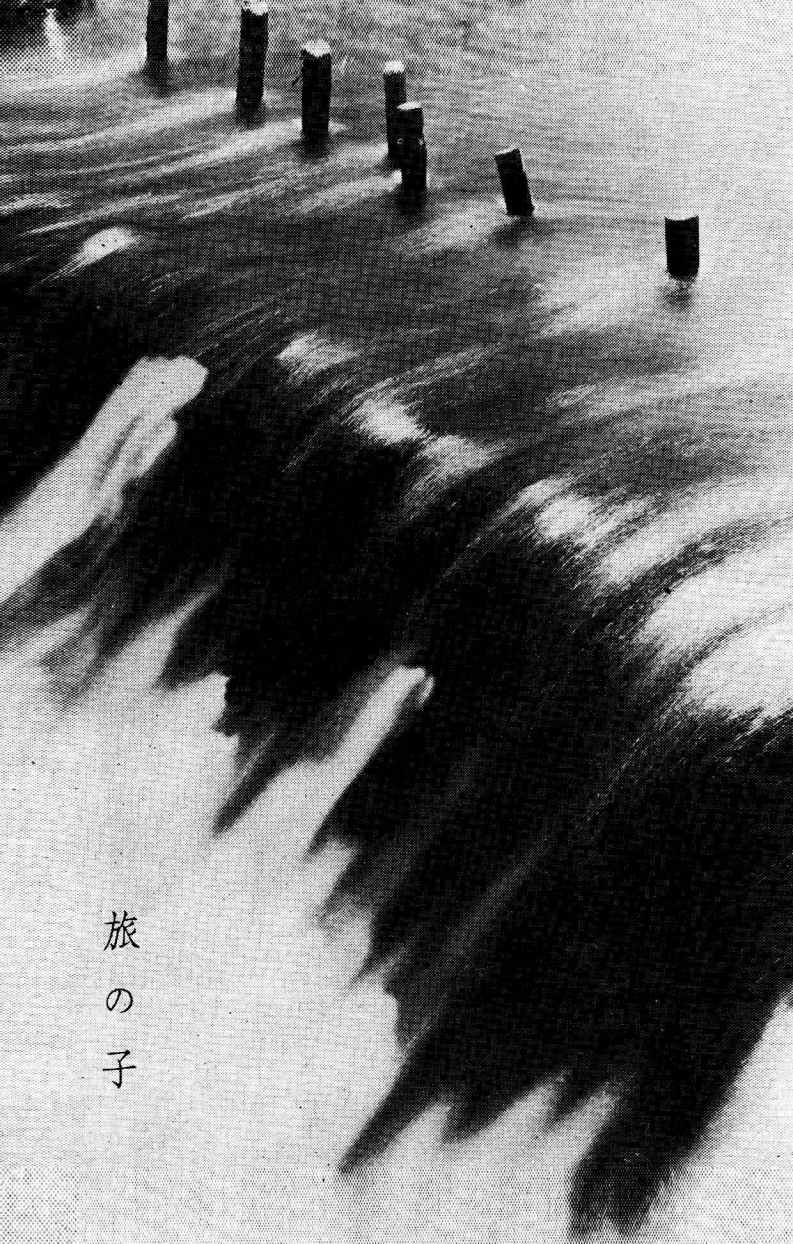
オランダゆき

オランダへの旅……128
花の都アムステルダム……131
木靴の音……134
煉瓦と花……137
プロボーのことなど……140

慕情

亀岡・篠山街道……146
高野山……157
神戸を去る日に……168
大宰府紀行……188
近江八幡……201
醇乎の葛……211
神戸からの船……221
私の沖縄……224
あとがき……231

表紙写真　市橋和男



旅の子

旅の子

未知の旅路。

それが、刻々にくりひろげられる人生だ。

どんなにか数え切れないほど多くの先人たちが、歩いた道である。それは、どんなに小さな川でも、橋でも、草でも、花でも、誰かの目に触れている。誰かの心に触れている。眺められつくした、存在である。

しかし、それに、自分が逢うのは、その時がはじめてなのだ。なにもかもが新しい。自分の目で見る、自分の心で知る、そのことの意義。いかにおびただしい先人たちが通り、数々の知恵にふくらんだガイドブックが与えられていようと、それは、自分のそのとき、を規定し切ることはできない。

汽車にのっていて、一度に両側の窓の外を眺めることができないのを、私はいつも、運命に似ている、と思う。

ふたつの目はふたつを合わせて、ひとところを見つめるようにつくられている。だから、何気

なく左側の海ばかり眺めていて、ふと右に、すばらしい山の形の展開しているのに気づくと、あっと思う。惜しかった、もっと早くから右に注意していればよかった、などと思う。

反対に、山ばかりみつめて飽きた目には、海があるのに気づけばよかったと、海にはっとするだろう。ただ、顔をむけている方向に、どんな景色があらわれ、どんな人物が登場するのか、それを見、それを自分の景色、自分の人物としてしまうことになるかは、まったく、その時の偶然という結果になってしまう。私は自主的に、自分の人生を創造し、選んで生きているようだけれども、なお、そういう意識で生きていてもなお、ほとんどの部分に、偶然的、運命的な要素が、大きくはいっているのを感じる。いいかえれば、運命的、偶然的に与えられてゆく要素の中で、すべてをそれにまきこまれず、その中で、棄てるべき要素を棄て、自分がどうしても必要とする必然のもの、を選び身につけてゆくことが、まだしも自主的な生き方だと言えるのかもしれない。大切なものなのに、それを惜し気もなく棄ててしまい、みかえってはならぬ存在に心をとめて、貴重な人生を空費する……そんなことばかり、くりかえして、ほとほと疲れ切っているのだけれども。

仕事で、よく旅をするようになった。子どものころは、家の外にでることが不安で、自分ひとりの部屋に籠って本を読んでいるのが大好きであった。からだの弱かった子は、からだを部屋の中に置きながら、精神は書物を通して、人間界の至るところに動きまわっていた。空想、思考、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

心の自由がどんなにたのしいものかを、弱いからだのゆえに人一倍早く味わったのだ。心の旅は、いまも輝かしい魅力をもって、私に安らぎを与える。「たとえ、どのようにからだの自由が奪われようとも、この純粋なよろこびだけは、いつまでものこされているよ。」そうだと、私は疲労の底で微笑むのである。

けれど、具体的に、未知の土地をたずねてゆくからだになれたことも、大きなうれしさであった。もともと、思いあきらめていた可能性である。それが、そう強くもないからだが、かえって、ふだん強いと思いこんでいた人よりも、しっかりともって、空路十六時間の、異国への旅も、元気いっぱいでたのしかったし、汽車も、船も、くるまも、のりものには酔わなくなっている。仕事、という絶対の目的があることによって、私は自分を、いつのまにやら訓練することができたのだ。たいていの場合に悲鳴をあげないですむよう、仕事にさしさわりを来たさないように、からだが心についてきだしたのだ。

時々、仕事でなしに旅をゆっくりたのしみたいな、と思うことがある。けれど、ほんとうに、してもしなくてもすむ場合の旅は、そんなに、よいものなのだろうか、という気もする。心のついてこない旅なんて、まったく無意味だろう。猶予のならない時間のうちに、何かをつかまえなくてはならない気の張り。それは、天候の回復を待てないスケジュールの中で、時には無謀と思われるような強行であったり、あるいは急に予定をかえた、思いもかけない方向転換であったり、

それはそれで、まことに印象的な、美しい刻々である。ひとりのときも、道づれや宿の人たちとの、素朴な会話がうれしいし、カメラの方やプロデューサーなど、多人数での旅は旅で、行く先ざきが公私ともにの、ディスカッションの場になってゆく。人間と人間との触れ合いの背景に、新しい景色や、未知なる予定への期待がみっしりとつまっていて、旅と人間の密接な間柄を実感させる。

旅が人生を通る。人生は旅である。

歩いても旅。歩かなくても旅。

たとえ、寝たきりの病床に身動きできない状態の人にも、人生はむこうからふりそそいでくる。心の旅はあくまで自由である。私は生きている限り、振幅の広い心の旅のできる人間でありたい。旅の子われ、それが自分の人生を豊かにすること、創ることなのだと思う。

（一九六八年）

心の旅

旅行家という肩書がちゃんと使われているのだった。

肩書というものが性に合わなくて、一個の人間であるだけでは何故いけないんだろうと、いつも素直になれない。そういう気性のゆえか、なんとなくおどろく。まったく、何事でもが、肩書になるものだ。

このごろでは、旅行は多くの人びとの、たのしめるものとなっている。もう、数少ない旅行家のめずらしがられる時代ではなくなった。かつて、自分が到底旅のできないところを、自由に旅している人びとの紀行を、胸ふくらませて読んだものだ。が、いまは、その紀行さえ、ほとんどの場合、単なる道しるべであり、観光案内であり、ガイドブック的な文章になっている。

これは、私自身について、心重く反省を強いられることだけれども、旅を書くことは、どのようなところに焦点を合わせて書くのがよいのだろう。私は、仏像を書いても、花を書いても、食べものを書いても、もちろん旅を書いても、それは、自分自身を語ることでしかない。いつも、自分の内部をみつめているので、思いが飛躍するときは飛躍するままに、勝手な展開をつづける。

旅した順序や、であいのよろこびのみを書くのではなく、その折々にでてくる自分、思いがけなく発見できた、そのときの自分を書きとめることに熱心だ。

だから、いわゆる寺そのものの案内、仏像そのものの解説、旅そのものの手びき、それを求めて読まれる方には、いったい、何をひとりよがりを書いているのか、と思われることだろう。私の心がいかに展開しようと、そんなことは知ったことか、早くその説明をしないか、といった腹立ちさえ、感じられるだろう。

だから私は、ガイドはつとまらないと、自覚している。このごろの旅行ブームのために、いろんな雑誌社からあちこちの旅行地についての記事を書くように依頼される。まるで日本中の各地の事情を、知りつくしている者であるかのような、信頼のされかたである。そのたびに申しわけなくて「私はとてもご案内できませんので」とあやまってしまう。正直いって、思いにばかり心がむくので、駅の名や、歩いたキロ数や、泊った宿の名や、費用や、名物や、是非みておかなければならないもの、といった知識を記憶しにくい。

空や、雲、水、山、花、そしてゆきずりにであう人びと、ふと頭をなでて通った幼な子の目、今どき都会ではめずらしい下駄の直しやさんの仕事している姿、といったものが、いつまでも心にのこっている。貴重な文化財であっても、そのひとつに、感動するかと思うと、また、何のよろこびも起らないこともあって、立派とされているものすべてに、同じ自分がひきだされるわけ

ではない。何からでも自分の、そのとき問題としていること、つねに思いつづけていること、などがよりよく育つことを願っている。

「私は割に仏像をみて歩いたり、史跡を歩いたりするのが好きだったんですが、このごろ、いやになってきました。何をみても、ああこれがそうか、と思うだけで、ほんとにうれしい気がしないんです。感動がないんです。だから、いったい私はいままで、何をよろこんでいたのかしらと思って……」

といった若い女性があった。率直な方だなと、私はうれしかった。まず、このような自己発見と、自己批判のあるのが、うれしいのだ。おそらく彼女は、一種の文化的流行、あるいは、教養主義的風潮に共感して、そういうふうに自分を動かせていたのであろう。それにはそれの陶酔や没入があり、そのように自分を在らしめていることへのよろこびがあったと思う。

けれど、この女性は、その自分にいつまでも礼讃をおくってはいなかった。これは、「これでよいのか」というたがい、「はじめからよいものだと思いこんでであう、そして当然のように感動している」むなしさが、意識されてきたのであろう。こういう自覚がないままで、ほんとうは好きでもないことを、好きだ好きだと思いこんで一生過すお人も、ないわけではない。その反対に、はじめっからほんとうに好きで、一生をそのために費して充実した日々を送る方もあるはずだ。欲も得もなく、いわば教養にプラスしようがマイナスになろうが、人がよいことだといお

うが、いやなことだといおうが、そうしなくてはいられぬ心の必然性をもって動くときは、すばらしい充実感となるだろう。

できれば、そういった必然性をもって、自分のいのちの日々を、みっしりと埋めてゆきたい。一般的な通念や観念や風潮やらに流されないで、「それはほんとうに、自分にとって絶対によろこびであるだろうか」とつねに問いつづけたい。はじめはそういう形ではいったせかいにでも、真のよろこびに至る道はちゃんとある。それを発見するのは、どこまでも、自分の力によらなければならない。何も彼も……手びきも説明も、そして個性的であるべき感動や批判までも他人まかせで安住するのは、他のさまざまな人間の問題についても同じ姿勢になるようで、危険である。

私は、その若い女性に、こんなふうに自分の考えをいってみた。

「それはたいそうすばらしい自覚だと思います。やっと、正直なご自分を認識なさったのではないでしょうか。私も、同じような体験がありましたが、なかなか、その自分の実体を思い知るのに時間がかかりました。観念の毒をうけ易い人間でしたし、自分の実体をさとりながらも、それを認めることのこわい、弱い人間でした。でも、やはり、自分で、自分の心にできるだけ忠実な人生を創るためにも、勇気をだして、何に逢ってもほんとは心の動いていない自分をはっきり認識するより、方法がありませんでした。つらかったし、情なかったのですが、そこから、充実感に裏打ちされるよろこびを味わう境地に出発できたような気がします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton